

文化・文芸

✉bunka@asahi.com

日曜～金曜掲載

韓国の名匠 村上春樹さん短編映像化

現代の怒り 根源探る

村上春樹さんの短編「納屋を焼く」を、韓国の名匠イ・チャンドン監督が映像化した「バーニング」の劇場版が1日、公開された。NHKの「アジアの映画監督が競作で」村上春樹さんの短編を映像化する「プロジェクトの第一弾で、日韓で共同制作された。イ監督は「今の世の中、みんな何かに怒っている。その『怒り』の根源を探りたかった」と語る。

012年に朝日新聞に寄稿した文だ。尖閣諸島など領土をめぐる問題が、東アジアの文化交流に影響を及ぼすことを憂慮している。

村上さんは「『我々は他国の文化に対し、たとえどのよ様な事情があろうとしかるべ



イ・チャンドン監督

き敬意を失うことはない」という静かな姿勢を示すことができれば、それは我々にとつて大事な達成となるはずだ」と寄せた。その思いをうけ、NHKが村上さんの短編の映像化を通じて、アジア各国との相互理解を深めようとプロジェクトを企画した。

イ監督は盧武鉉政権下で文化観光部長官もつとめ、日本の大衆文化の開放にも力を尽くした。韓国でも絶大な人気がある村上作品の魅力を「洗練されていると同時に、私たちが生きる世界の複雑さを幾層にも入れ込んで」と語る。日本同様、韓国でも経済格差が広がっている。イ監督は「最近の若者たちは、競争

というベルトコンベヤーに乗せられ、走り続けなくてはならない恐怖を感じている。役に立つか、立たないかで人間の価値を決める世の中への怒りがある」。「納屋を焼く」にその怒りと通じるものを見いだしたという。

原作には趣味で「役に立たない納屋」を焼く男が出てくる。「話者である僕が『不必要なものかどうか、君が判断するのか』ときくと、その男は『自分は判断なんかしない、焼かれるのを待っている。納屋を焼くだけだ』と言うんです。でももし納屋が物質ではなく、人を例えているとしたら……」

映像化にあたり、現代の韓

国に舞台を移し、特に後半を大胆に脚色した。アルバイトをしながら小説家を目指す青年、その幼なじみの女性、「役に立たないビニールハウスを焼くのが趣味」という正体不明の裕福な男の3人で物語が進み、ラストに深い余韻と謎を残す。「シンブルな謎を追いつながら、観客の住む国に関係なく、世界や人生への根源的な問いをしてもらえ

る映画になったと思う」

「バーニング」劇場版は、昨年5月のカンヌ国際映画祭で披露されて高く評価された。昨年12月、その95分のドラマ版がNHKで放送された。今回の劇場版は148分

だ。

(伊藤恵里奈)